

ハチ没後80年、ハチ公と上野英三郎の像を東大につくるために寄附をお願いします。

東大ハチ公物語



設置予定場所



～ハチ公と上野英三郎博士の像を東大に作る会～

※写真は「ハチ公文献集」林正春編(1991年)による

ハチ公と上野博士の物語

ハチ公は飼い主が急死した後も、渋谷駅に毎日かよって、死ぬまで10年間も待ち続けました。

生粋の秋田犬として秋田県大館市で生まれたハチが、生後50日で鉄道で小荷物として運ばれて東大農学部教授であった上野英三郎博士のところに来たのは、1924年(大正13年)の1月でした。大の犬好きであった博士は、体の弱かったハチを自分のベッドの下に寝かせるなど細心の気遣いをして育て大いに可愛がり、大学や渋谷駅までいつも送り迎えをさせていました。1925年(大正14年)5月21日、博士が大学で急死して突然の別れが訪れたのは、ハチが上野に飼われ始めて17か月の時でした。ハチ公はその後、朝夕に駅に通い、改札口から出てくる人々の中に上野英三郎の姿と匂いを求め続けました。ハチの心には、愛情に溢れる飼い主に可愛がられた日々記憶が消えることがなかったに違いありません。

ハチ公は晩年、有名になってから「忠犬」と呼ばれるようになり、戦争と軍国主義の時代にあつて恩を忘れぬ犬として修身教育に利用されました。ハチ公を世に知らせた社会的な生みの親で犬の愛護と研究に生涯を捧げた斎藤弘吉氏は次のように述べています。

「死ぬまで渋谷駅をなつかしんで、毎日のように通っていたハチ公を、人間的に解釈すると恩を忘れない美談になるかも知れませんが、ハチの心を考えると恩を忘れない、恩にむくいるなどという気持ちは少しもあつたとは思えません。あつたのは、ただ自分をかわいがってくれた主人への、それこそまじりけのない、愛情だけだつたと思います。ハチに限らず、犬とはそうしたものだからです。無条件な絶対的愛情なのです。人間にたとえれば、子が母を慕い、親が子を愛するのに似た性質のもので、渋谷駅を離れなかつたのは、心から可愛がつてくれた到底忘れることのできない博士に会いたかつたのである。ハチ公の本当の気持ちは、大好きな博士にとびつき自分の顔を思いきりおしつけて、尾をふりたかつたのである。」

没後80年を契機に私たちが東大に作ろうとしている像は、上野博士を迎えに来たハチ公といつもそうしていたように、ハチ公が博士に飛びついてスキんシップをしている、大喜びの愛情あふれる姿です。人と犬との素晴らしい関係を象徴する像です。